

瞳子

常磐 誠

連載第二回 追想劇

今時の子供っていうのはお受験も珍しい話ではないよな、なんてことを思いながら、私は自分と同じ制服姿の中学生を見ている。夏の陽射しを受けて緑の葉がキラリ。目にうるさく輝く。正直、うざったらしい。

私はその制服を中学生の時には着ていなかった。至って普通の区立小学校、区立中学校の卒業で、この高校には一般入試で入ってきた手合いだ。

ピアノの道に進む気満々だった私は、特別なことを考えることもなくこの高校に進学していた。

成績的に中学校の教師からは進学校を勧められたりもしたが、部活強制入部とかいう時代遅れも甚だしい校風だったり、課外とかいう時間泥棒制度があったり。

そういうものには反吐が出る。それだけあつさり三者面談の場で伝え、私はできる限り自由に過ごせる時間、イコール、ピアノに向き合う時間を増やせる学校を選んだのだ。その選択は、間違っていなかったと思っていた。

校門をくぐる。気が重たい一日の始まりだ。

靴の中に画鋲が仕込まれている、なんてことはない。そんな直接的な暴力などという頭の悪い行動を取るような連中ではない。

特進クラスに進学できたことを誇りに思う連中というのは、一体どれくらいいるだろう？ 親、親族なんかはまだ喜ぶのもいるんだろうが。……うちは、違ったな、とか。

そんな断片的な、無関係なのかちよつとくらい関係のあるのか、そんなこともわからない、というか、どうでもいい、断片的な思考を廻らせながら歩いて教室へ向かう。ああ、今日は早起きしたはいいけど、ピアノ弾けなかったな、というか、何を律儀にピアノ禁止令遵守しているんだろ、私。

それも思ったけど、ため息しか出ない。運動不足気味の腕、手首、指をぶらぶらさせては、ハア。またため息。教室のドアに手をかけて、横に動かす。すると、

ボスン、という音も立てずに黒板消しが私の目の前数センチ先を通り過ぎ、床に落ちる。

「……………」

何も言わない。何も言えない。

私はただそれを拾って、元の位置に戻す。「んだよ」。結局引つかからねえんじやねえかよー」

「だろーよー！ ま、これで私の勝ちだからー！」

「ちきしょー持ってけ泥棒！」

「やったね今日の昼飯ゲツチュ！」

背後で流れる下卑た声を背景音にしてや

り過ぎしながら。

もう、こういう手合いに筆談器を向ける気分には到底なれない。

制服が可愛い、学費高い。特進は学費免除。女子校で。お嬢様学校なんて言われているようだ。

現実の姿がこちらになります。拡声器片手に叫び出したいような気持ちになったことが去年はあったが、もう今やそんな風に思うこともなくなった。

ここは私の居場所じゃあない。去年の話。そう思わせるだけの話が去年あっただけ。去年も私は勝てなくて。芸術を、私の音楽を、理解できない連中に親切にされて。

その後ろで、その陰で、結局あいつは勝つていった。今日家に帰る頃には到着しているだろうか。瀧中琥太。はどこで幼馴染。

私とは、違う存在。

私があいつと違うのは何だろうか。三歳の頃、思い切り抱きつかれた時、あいつが男の子であることや、私と比べて随分とデカイこと。真っ先に思う『違う』はそこで。

そんな表面的な部分だけで気づきが済めば、それがベストで、ハッピーだ。そりゃあそうだ。親戚ではなくて、もうこの事件以来二人が出会うことがなければ、琥太が赤の他人同然の人物であれば、今私が思うような気分へのめり込むこともなかっただろう。もう何度繰り返したかわからない問答、暗闇に纏わり付かれたまま浮かび上がることも許すことができないまま、私は今日という一日を過ごした。

どういうやり取りだったか今更思い出す

こともできないが、朝のホームルームが終わった後、一体何故なのかわからないが私が一人で床を雑巾がけしていた。ため息を吐く若い女教師と、一時限目、移動教室の授業に遅れたことが、どういうわけか脳にチクチクと不快な刺激を与えるイメージを残していた。

家路に向かう道の途中、時間的にもう新緑のうるささを感じることはなくなつたが、どうしたって私の中にその緑を受け入れる度量などある訳もなく、やっぱり私はイライラしていた。

そのイライラは別段周りを攻撃するような感じでは一切ない癖に、妙に私のことだけは念の入ったしつこさで付き纏い、私を淀んだ暗がりへ連れ込んで行く。

あれ、私ってこんなだったっけ？なんて、らしくもないような感じの気持ち。

小学生の時、柚真ちゃんは強いから良いな、なんて言われていて、その意味がよくわからないまま、中学生になって、いや、その前から、そう。もっと前から。私、強いと言われ続けていた。母から。近所の人達から、弟から。学校の友人、教師、気づけば、私はその言葉に流されるようにして強いと思い込んでいたような気がする。強い人だと思ふようになった気がする。

だから私、今自分のことを、『いつの間に、どうして私は弱くなってしまったんだろう』なんていう風に思ってしまったんだ。

もう何度目のため息かなんて数えてられない。嫌になる程積み重ねたため息の後、

私は家の門を開ける。それと同時に、

「おっかえりー！」

と私を出迎える上半身裸の大男。去年よりまた更にてかくなつたのではないか。

「そろそろじゃないかなつて思つてだがっ！」

発言の途中でも構わず顔面を殴りつけてやる。勿論グーでだ。握り拳、全力で。

「いたいー！ 出会つて三秒で殴られたよ？」

どうして殴られたのか理解できない様子で能天気な顔を押さえる琥太は叫ぶ。

『何故裸なんだ。どういう見だ。野生児か。東京から出て行けカツペが』

「すんごく責められてる！ なんかくわかんないけどごめんさい！」

すっかり腰が引けた様子の琥太を尻目に、私は玄関を乱暴に開ける。気が重たい時に、また目にも気分にも悪いものを見てしまった。玄関を開けた先には、

「うっす。一年振りだな」

と先の奴よりはずっと紳士的に挨拶してくるケビンがいた。服装も、まあ薄いTシャツ一枚に短パンという出立ちではあつたが、野生児スタイルよりかは遥かにマシ、というところだろう。こちらも、あいつ同様、また体が大きくなつていのように感じた。

「仕方がないんだよ。稽古の時に服着てると落ち着かないんだもん」

貫太相手に何かの申し開きでもしているのかぐちぐち言いながら琥太が玄関に来る。

「だーから言つたろ？ 服着ろつて」

金色の、少しだけ癖のついた髪の毛をい

じりながらケビンが呆れた口調で言うと、

「いやいや。ケビンが言つたんじゃん。裸で一発稽古かますくらいワイルドな方がインパクトあつてモテるつて！」

「だからそれを真に受けて実行に移すからお前モテねーんだつてこのデーテーが」

「何を！ というかそれお前もだろうがクソデーテー！」

二人の豚！矛盾してるしそもそも豚に失礼かーが喚くその隣で、

「デーテーって何？」

と貫太が聞くが、

「子供にはまだ早い！」

と二匹が同時に鳴く。オーインク。オーインク。

つまり私には早くない、ということか。女子なんだが。これでも。そう思った私はこの二匹の後頭部を思い切り鷲掴みにすると、そのまま全身全霊、あらん限りの力を込めて情熱的に接吻させてやり、そしてそのまま部屋に向かう。それを受けて三人もこちらに向かつてくるのだが、

「お前の所為で俺まで攻撃されちまつたじやねーかクソ」

「んだと！ 人を担いでおいて拳句そこまで人の所為にするとは人の風上にもおけんぞこのバカ」

「くつそー。今もいてえわクソ石頭が」

「はんっ！ 鍛え方が足りねーんだよ何のために髪生やしてんだよ軟弱」

「やんのかテメェ！」

「やつてやるよ後で表出る表！」

「ねえデーテーって何！」

「子供にはまだ早いー!」

そんな様子で未だに吠えあっている声を遠くで聞いて私は、またこの季節が来たんだな、なんていうセンチメンタルな思いを抱く。……訳がない。

居間に入ってきた所を筆談器の角でぶんと殴る。ターゲットは、琥太。

「何で僕……だけ……?」

頭を抱えしやがみこみ、涙目になっている琥太を尻目に、

「そりやまあ琥太の坊主頭は殴りやすいよなあー」

ケラケラ笑いながらケビンは部屋に向かって歩いて行ってしまった。

ケビンは幼少期から体の大きさが祟り結構乱暴な性格だったそうで、それを心配した両親が伝を頼り巡って琥太と共に相撲を始めさせた。力の使い方を学ばせた方が良さだろう、という曾祖父の意見だったそう。詳しいいきさつはもうおぼろげになってしまっているのだが、ドイツ人の両親としては相撲のあの格好だったり、乱暴な性格を心配しての相談なのに武道を学ばせることだったりという部分に対し多少、いや結構な心配を抱いたそうだが、

「まあずっと全国三位圏内なら文句ないっしょ」

と飄々とした顔でケビンは言う。そしてそれは、本当のことではないらしい。

元々あそこの地域では相撲が盛んで、琥太やケビン以外にも、元氣、昴、健太と、合わせて五人の豆力士がいたことになる。元氣や昴はケビン、琥太以上に体が大きく

性格も粗野というか乱暴で、そういう連中に揉まれていく内にケビンもかなり丸くなり、今に至っている。

力で勝てなくとも、やり方はある。そんなことを小学生の頃から口癖のように言っている琥太とケビンは普段から馬が合うようで、しかも勉強もできる……というか、勉強ができる手合いだからこそ、馬が合っている部分もあるのだろう。二人は相撲部がある中で一番偏差値の高い高校に通い、勉強と部活を両立させているのだ。

夏休みで学校がない代わりに宿題に塗れる貫太の為に今年も勉強の面倒を見る約束が既についている様子だった。

元氣と健太は相撲部がある高校の内、偏差値の低い方へ進学した。二人とも、勉強は苦手な様で、中点連結定理の文字を見ようにも、目が上滑りするらしく、その定理の名前すらも覚えられなかった。というか、中二の三角形の合同条件すら覚えられない様では色々と察しがつく程度。脳筋という言葉がピッタリだと琥太、ケビンが笑うとむしろ誇らしげにする辺り、そういう連中というのはやはり平和なものだと思わずにいられない。

では昴は、というと。

「でも去年も言ったけどまさかスー兄ちゃんが中卒でプロの相撲取りになるとは思わなかったなー」

しみじみと貫太が琥太に喋りかけ、

「うーん……。厳密にはプロじゃないんだよね。あいつもう十七になるのに未だ序ノ口序二段行き来してるレベルだし。給料な

いんよ。鍛え方足りないよね。正直」

目を瞑り、少しだけ不機嫌そうに、顔をかきながら琥太が答える。

中学生になってから琥太は昴と一悶着起こしたらしく、それが解決したにも関わらず琥太はやっぱ昴のことになるとほんの少しだけだけでも、こうして不機嫌な顔をしてしまう。

小学生の時は本当に五人とも仲良しで全国大会の度にこの家にやってきては貫太を弟分に六人組としてわんぱく振りを発揮したものだだったが、中学生になってからは急に昴がグレてしまい、相撲とも距離を取ってしまうようになった。

琥太がそれをどうにかしようとして動こうとし、騒乱になることを恐れたケビンが異常なまでに気を利かすようになってかなりピリピリした雰囲気が三年前、私達が中二の時にあった。

結論を言えばケビンの努力も虚しく、中三の時にタバコを悪びれもせず吸っている昴と鉢合わせしてしまった琥太が完全にキレて昴を病院送りにしてしまい、五人全員が進路の前途が危うくなるという事件にまで発展してしまったが、そこは琥太の祖父や昴の父親を始め周囲が色々手を尽くしたのだろう。どんな方法を使ったかは知りたくないし知ろうとも思わないが、無事に進学組の四人は希望通りの進路を取るこゝとなつた。

その引き換えというか何というか。昴は琥太の祖父が親方を務める部屋に入門することとなつた。どの道学校にも通わず落伍

していたような奴で、卒業したらドカタかヤクザかみたいに噂されていたから、ついでに拾っておいてやるかという親方の親心だったそうだ。

琥太は昴のこととなると決まって口にする。

「あいつさ、才能は絶対にあるんだよ。体も百九十二あるし。うちらの中で一番大きい訳よ。ほんっと。もっと徹底的に鍛えないとダメだね」

私はこいつらの事情は知ってても相撲は知らない。興味もない。貫太が漢字の書き取りを必死に進行させている横で愚痴っているどデカイ図体が昴に対し何を思っているのかも、別段深く理解しようとは思わない。ただ、ぎしぎしと音を立てて戻って来たケビンは、

「まああいつもあいつなりにやってんだから大丈夫だって。けどま、教習所でのやりかしはマジでらしいというか、ウケたよな」丸くなっていった為か、絶妙に空気を読んで気苦労を抱えるようになり、琥太をキレさせないようにするのに随分と腐心するようになったと思う。

「琥太のキレ方ってもうあれだし。烈火っていう表現がピッタリなんだよ。もう俺あれ見たくないんだよ。もうね。マジ殺されるって思うから」

そんな風にケビンや昴を始めいろんな奴が表現する琥太の怒り方なのだが、私はその伝聞が信じられない。

「ああ。そうそう。あいつブランク長かった癖に何か勘違いでも起こしたか昔みたい

にやれるつもりで体動かして挙句怪我したんだよね。ウケるウケる」

鼻で笑う琥太には少しだけの悪意が感じられる。それはケビンも、だ。

「救急車ー！ 救急車呼んでー！」

ハモった二人と、ハモったことにおかしさを感じた貫太が笑い転げるテーブルの上を見て、

「……………」

無性に私は筆談器をそれぞれの頭に落としてやりたくなった。楽しげな話、楽しげな笑い声そういうものが、何か自分に刺さるようで気持ち悪い。男同士のやり取りだ。それは少なくとも私の今日受け取ったアレとは違う。それは理解できても、どうしても気持ち悪いものは気持ち悪いのだ。

「……………さあて、九月場所に向けて頑張ってる奴がくしゃみをしたであろうところで。うちらも集中しましょう、か」

私の呪うような、少なくとも素直に笑いに乗れない目線を感じてか、空気読みのケビン、ではなく能天気な方の琥太が、言うのだった。

琥太の何が信じられないのかと言えば、それは顔つきだ。頭の不出来な貫太に勉強を教える今でも、琥太はいつだって笑っている。にこにここと。へらへらと。

いつだって笑っているんだ。私がいる側で、こいつがキツそうに、辛そうにしている様子なんて見たことがない。

小学生になり、琥太達がこっちに来るようになってただの一度も、琥太が泣いた顔を見たことがない。

泣いたことはあるらしい。五人組の中でケンカすることも珍しくはない。その結果、なんていうこともあるにはあったそうだ。

その時私が何かの用事で、例えばピアノのコンクールとかで出かけているタイミングだったりしたこともあるにはあったが、どうやら違うらしい。琥太は私のいる所で泣かないようにしていて、そういう時には必死に隠れて泣いているらしかった。

何の為にそういう風になっているのかわからない。訪ねたこともあるが、

「男の子は泣いちゃダメだからね！」

得意気な顔をしてそんなことを答えるのみだ。いつだって笑っている。私の中で琥太は、いつだってにこにここと、へらへらと、笑っている。まるで唐変木だ。

そんな琥太が、強い、と。怖い、と。そんな評価を受けることが私にはどうしても理解できずにいる。さっき筆談器でぶん殴った時も、あいつは私を呪う一言も発することなく、ごめんね。うるさかったね。と私に手話で返してくるだけだった。

そういう風に、気遣うようにして笑い手指を振る周りが、琥太が、気に食わない。私は、そういうのを望んじやいない。もう一発ぶん殴ってやりたいと思った。実際に私は筆談器を振り上げていた。でも、

「……………」

それでも琥太は、多少びっくりしてはいたけれども、笑っていた。殴りたければ、殴ればいい。そんな無言の伝言を差し出すようにしてあいつが笑うから、私は結局その腕を下ろすしか、なかったのだった。

三人が勉強を進めている間に私は席を立ちお茶を飲んでいた。後で三人の分も出してやるつもりで盆と人数分のコップも用意している。氷を入れ、冷蔵庫の中の麦茶を入れてやれば、後は持っていくだけだ。私はそこまでは準備しておいて、どうにもすぐに戻る気分にはなれず、じゃあどうしてここまでクソ親切に準備しているのか、自分でも理解できず呆れていた。

琥太は頭が良い。私が喋れないことを踏まえ、一年生の頃から曾祖父に教えるを請い手話を覚えていた。

私はどうせ皆手話を理解できないだろうからと父に子供用の軽い筆談器を準備してもらっていた訳だが、琥太は筆談器がいらぬことを出会ったその日に手話で伝えてきた。これ以上ない程のドヤ顔で。

琥太は頭が良い。そして要領が悪い。私の中で不愉快な気持ちたちが湧き上がり、筆談器で頭をかち割ったことは言うまでもない。琥太は泣かなかった。でも、涙目だった。私が怒られた。泣くまで怒られた。

その年、私と父が指点字で話しているのを見た琥太が今度はそれを覚える！と息巻いた。私と話をするのならもう今の状態で、というか、そもそも私が筆談器を使えば手話すら必要ないのだから何ら問題はないのに、何をそこまで私も母も曾祖父も琥太を引き止めた記憶がある。しかし琥太は折れなかった。結局、父が熱心なのは良いことだとかなんとか言って、教えることになった。

指点字を教えられるのは私と父の二人だ

けで、これは流石の曾祖父もマスターはしていなかった。

参考書もあまり豊富にある訳ではなく、しかも子供向けとなるとなおのことだ。頭が良いと言われることの多い琥太もこれは時間がかかったが、三年生の時にマスターしたよ。という連絡があり、その年の出会いの時にはいきなり手を取られ、

『これでいっぱいナイショでお話できるね』
とか言われた。ドン引きだ。思い切り股間を蹴り上げたのだが、うまく足を閉じられてしまった。

「あぶない……。あぶなかった……」

私は、冷や汗に濡れた琥太の額のテカリと汗臭さを今でも忘れていない。

更に来年。琥太や私は小四になった。この年はこの年で、何を言われるんだろうかと私ももう半ば慣れっこになってしまった。きらいがあり、

「琥太君は柚眞のことをとても好いてくれてますからね〜」

「いやいや。でも僕より強くないことには娘はあげられないかな〜」

といった具合に茶化す両親のことも冷めた目で見ていた。

『久しぶりにまた会えてきた、とってもうれしい』

があいつの言葉だった。あいつの一人称は、ずっとこた、自分の名前だった。

『柚眞もそうだよね!』

私は待ち合わせ場所に着いてからただの一度も笑っていない。ニヤリともくすりともしていないというのに、何故にこうも自

信満々なのかと私は呆れ、

『これで喜んでもるように感じられるお気楽な脳細胞がいつそ逆に羨ましいわ』

と一蹴し、更に父親が全盲であることを良いことにその指をつねりまくったりもした。

『えー。でもこたは嬉しいからいいの』

とニヤニヤ笑いながら打ってくる文字にイラついた私は手を振り払い、筆談器に殴り書いた。

『指点字の為に仕方なく手を繋いでやっているの。少し嬉しそうな顔しないで』

これにはちよつとだけがつくり来ている様子だった。更に小一になった貫太が、

「あ、それ俺も少し思った」

と気の利いた助け船を出したおかげで、今回はあまり怒られなかった。

琥太は琥太で、

「こた、単純だからつてよく言われるんだよね……。えへへ。気をつける」

そう言つて今回ばかりは反省している様子だった。

そんなやり取りがいつまで続くのかともう本気で飽き飽きしていた頃、曾祖父が息を引き取った。

また、あいつと顔を合わせないといけないのか。という落胆というか、いやーな気持ちちがドツと溢れてくるのを感じて、ひいおじいちゃんが死んだ、という現実よりも、そのことの方が何故か重たかったことを覚えてる。

それつてどうなんだろうと自分でも思うのだけれども、自分のことよりも幼馴染の

方を意識することを多少喜んじやうような人だと思うから、まあ良いか、なんて思ったりもする。……いや、これは祖母から言われたことだったりするのだけれども。

結構な覚悟を決めて曾祖父の葬儀に参列した私だったが、琥太は予想していた以上に私に絡んでは来なかった。私に気づいていないなんていうことはなく、何度も目が合い私に微笑みかけていたりはしたけれど、あいつは話しかけて来なかった。

曾祖父が骨になる時に、

「泣くもんか。……泣くもんか」

震える唇がそう動いていて、既に私や周囲の空気にほだされた貫太が泣いたりしているのに、琥太は最後まで泣かなかった。骨になった、元々百九十六センチもあつた曾祖父の、一抱えになつてしまった姿を見ても、そのグロテスクを目の当たりにしてもなお、琥太は泣くことはなかった。

私は、その時の琥太の顔を、目を。早く忘れたい。

そう思った時、廊下と台所を仕切るのれんが動いたのに気づいた。琥太だった。

「戻りが遅いなんて思つて。これ、準備してくれたんだ。ありがとう」

いつも通り琥太はにこにこ笑つて声をかけてくる。

昔のことを思い出し過ぎた。夏の暑さにやられてしまつているのか、気が滅入ってくる。

「あんまり無理しちゃダメだよ。柚眞。今日は早く休んだ方が良いんじゃないかな。」

顔色がわ……」

悪いよ、と言おうとしたのだろうが私はそれをテーブルを拳で打つ音で断ち切って、『うるさい。アンタに言われなくても自分の体調くらい自分で管理できる。黙ってて』そう手話で言ってるから横を過ぎ去ろうとして、ぼかんとしている琥太の背中を軽く叩いて、

『ねえそうだ。小五の時の話なんだけど』

そう話しかけた。突然のことに面食らった様子 of 琥太は微笑は絶やしていなかったものの、少しだけ体が疑問に傾いていた。

『あんたって何で五年になってから急に自分の事、僕って言うようになったの』

という質問にあいつは、

「えー？ 内緒」

少しだけの気恥かしさを湛えたような顔をしてごまかしてきた。

『そういうのいらぬから。答えてよ』

と私が食い下がっても、あいつは

「小五ってもう十一歳じゃん。一人称がこた、つてのはいい加減どうなの？ っていう話だよーそんな深い意味なんかないってば 柚真ったらやだなあ」

とにこにこした笑顔を崩すことなく答えるだけだった。だから私から核心を問う。

『ひいじいちゃんが死んだこととは無関係なの？ 本当に関係ないって言えるの？』

曾祖父のことを出した時、その瞬間に琥太は後ろを向いた。ほんの一瞬だけ、背中越しに琥太の表情に緊張が走ったような雰囲気を感じた。表情を隠したから、体から感じたものかもしれない。

とにかくその一瞬だけ、琥太は笑顔でなかったように感じられた。

「……………」

無言のまま琥太は歩き出す。手には私が準備したお盆。続きは戻りながら話そう、という意味だろう。その分厚い背中にぶつからないような距離をとってついて歩く。

「別にひいじいじから一人称を改めろ、と言われた訳じゃないよ」

私が横についたのを見計らって琥太が口にする。表情はいつも通り。にこにこと。へらへらと。

ひいじいじ。幼い頃から琥太が曾祖父のことを身内に話す時の呼称。これは幼い頃から変わらない。

「ひいじいじには別のことを伝えられたんだ。もっと、別のことをね」

『どんな？』

という私の問いかけに琥太は、

「うん。ごめんね。それは本当に内緒」

ときた。私は無言のまま睨んでいた。

「今話すのは気恥かしいから。それにお茶も氷が溶けちゃうと薄くなってまずいでしょよ？」

どうしたって核心を話すつもりはないんだろう。私が知りたいと思った琥太の変化のきっかけを、私はついに知ることができなかった。年齢を重ねた年長の成長、ということにおいてよ、という琥太の言葉は、要はそれが不正解である証にしか思えなかった。うまく言葉にできないとかいうような不器用な感情の類ではなく、明確な不正解。

「よお。お長いラブラブチュツチュのお時間
間は終わったかい？」

軽いノリで語るケビンの妄言を筆談機の
角でお返しして、どうにもすっきりしない
ままで私はその日を過ごしていた。

次の日、私が夏休みの課外から帰ると家
では竹刀の打ち付け合う音が響いていた。

夏休みということもあり、子供達（私と
同年代、というか高校生もいるにはいるの
だが）の気合いの入った音は、ピアノに集
中している時には別段意識しないというの
に、何故だか今日はやかましく感じられて
しまう。夏の暑さの気だるさ、蝉の鳴く声
にやられたように立ち尽くす私を、

「よう。おかえり。琥太の奴がまた例の奴
やってんぜ。丁度いいから袖眞も見に行こ
うぜ！」

ケビンが見つけて声をかけてくる。

『何で私が』

という手話を見てか見らずか、

「はいはいこまけーこたあ気にすんなって
んだよ。あいつもお前が見てたら気合い入
るぜー」

と調子良く私の鞆を引っ張り込んでいく。

そして私の部屋の前につくと、

「んじゃ、道場に集合な！」

とだけ言い残して豪快な笑みを浮かべた
まま消えていった。

そのまま私が来なかったらどうするつも
りなのだろうか。まあ、それはそれで構わ
ないんだろう。

「うっわあゝもっちねゝ！（勿体無い、の
意味だ）だから来いって言ったのに〜」

とか何とか、もったいぶった言い方で今
日のことをハイライトしてくるんだろう。

例の奴、というのは父が自分の鍛練を兼
ねて琥太に対して『いつでも隙があるよう
なら打ち込んで来い』と伝えているちよっ
としたゲームのようなものだ。

中学生になってから始めて、まだ一度も
琥太は父に一本たりとも打ち込んだことは
ないと聞いている。

琥太が打ち込むすんでのところで父の持
つ竹刀の切っ先が琥太の喉元に向かつてい
るパターンが基本形らしく、どんなに卑怯
な方法を用いても父は完璧に反応するらし
い。この稽古をやった日は必ず貫太やケビ
ン、元氣や健太がよくこの話をするから、
私も結果だけは毎年知っている。

ただ、ついに去年。高校生になった琥太
は父に成長を認められた。一本打ち込んだ
のではなく、逆に面打ちを食らいかけた訳
だが、父曰く喉元に切っ先を向けて止める
だけの余裕がなかったのだということ、
少しか父は上機嫌だったことを覚えてい
る。

それ故だろう。

「……………」

蹲踞の姿勢で座り父の様子を見ている琥
太が面と小手だけは防具を付けるようにな
り、妙な格好をしているのは。

『なにそれギャグ？』

「ほつといてよ……」

自覚しているのか、琥太は落ち着かない
様子であった。

竹刀の打ち合う音、床の踏み込みの音。

気合いを込めた怒鳴り声の応酬。瞬間的に交錯し合う木でできた、殺傷能力のない刃物達。

こんなもの、に父は人生をかけている訳だ。弟も、ここにいる門下生の一人ひとりも、人生、という程大仰でないにせよ、間違ひなく青春はかけていると言って良いはずだ。

命のやり取りという程ハードなものでもなく、不必要に優劣なんかを競い合っては明確に、そう。完全に白と黒が定まっちゃう世界で。彼らは、あと少数の彼女らは、生きているのだと思うと、私は窮屈に思えてきた。何が自分にそう思わせるのか、よくわからない。なのに、息苦しい。私は、一体何をしているのだろう。世界は全く異なる次元を私に見せるように急転しているようだ。今まで私が見てこようとしなかった舞台は、今の私には気持ちの悪いものにしか映らなかつた。正座する足が痺れる。立とうと思う、でも立てない。隣の琥太が、肩を貸そうと近づくが、断つた。不恰好になつても、少しだけ足を崩し、楽をする。

貫太はともかく、私は門下生ではないから、その姿勢を悪びれる必要もない。そもそも、父は目が見えない。

琥太は時折、立ち上がっては見よう見まねで竹刀を振っている。面だけの、一番単純な素振り。何年か見て、やっている内にそれしかない、と思つたらしいことをケビンや元氣が言っていたような気がするなど、そんなことが過る。だが行かない。その素振りを何回かすると、また琥太は蹲踞の姿

勢へと戻り、竹刀を置く。竹刀から手を離せば、無言のまま、目を閉じてしまうのだ。

『お父さんに一発入れるんじゃないの？』

あんまりにも琥太は父のことを視界に入れず素振りと蹲踞を繰り返しているから、ついに私も無関心で居続けることができず、琥太の体を叩いて手話で話しかけてしまう。

「……ないんよ」

稽古の邪魔にならぬよう声を潜めて返事をするが、私はその意味を解しかねた。それを察した琥太が、言い直す。

「隙が、ないんだよ。お父さんには、隙がない」

俄かに信じがたい言葉だと思つた。何故なら父は今私たちに背中を向け、二本の竹刀を両方とも利き手でない左手側に、それも少し遠いところに置いていて、門下生の指導を口頭でしているのだ。防具もしていない。

当然、ハンデというか、自身を追い込むためだろう。防具の有無や狙うタイミングについても一切遠慮はいらぬ、というルールになっている。

私だったら、もう小突きにいつているところだろう。

「ああやって誘うんだよ。狙うと見事に切っ先が突き刺さつてる。弟子の皆も師匠の電光石火の逆転劇を期待しているしね。今まで何回やられたことか」

少しだけ饒舌に琥太が言うと、父が振り返りにっこりと笑つた。なるほど。……そういう腹積りだった、ということか。私もそんな父を見て納得した。

「あの笑顔も、正直に言って怖いよ。柚眞のお父さんは、強いし、怖い」

「当たり前のことしか言っていないから、『何当たり前のことをさも大事なことに言うに言ってるのかわかんないんだけど』と返事をするよ、」

「そうだよね。近すぎるし、わかんないよね」

「そんなわからないことをへらへらと言っていると、琥太はまた立ち上がり、素振りを始めた。結局この日、琥太は父に一度も向かって行くことがなかった。行かないとケビンのハイライトがうざいんだろうな、と思っていたのに、とんだ拍子抜けも良いところだ、と私は思った。」

ところが、だ。この日の夕食時、

「琥太は強くなったね」

「そう父がおもむろに言うのだ。琥太も琥太で、

「ありがとうございます」

と一言返す。ただそれだけ、だった。そのやり取りに一切興味を示さないケビンは貫太と大量の肉を奪い合っていた。

「三回、だったね。どうして一度も来なかったの？」

「すき焼きの鍋に締めうどんを追加する、というタイミング。それを母が取りに行った時に、父が琥太にそう尋ねた。」

「三回ってバレてる時点で、つまりはそういうことかと」

「少々投げやり、というか苦笑いを浮かべて琥太は答えた。苦笑いには、悔しさも確かに含まれているように思える。」

「三回って？」

流石にケビンや琥太と張り合い根性でついて来ていたが限界を迎えた貫太が、仰向けに倒れこみお腹をさすりながら尋ねると、「お前あの場にいたのにわかんなかったのかよ」

とケビンに腹を潰されながら返された。

「ぐえっ！ ケビンさんやめてっ！ 死ぬ！」

と貫太が苦しそうな声をあげると、

「ケビンの横で満腹になって横になると危ないから僕の隣においでよ」

と親切そうな笑みを浮かべて琥太が言う。貫太はさっきのダメージがよっぽど応えたか、そうしようと体をよじらせ移動を始める。すると、

「琥太はそう言って腹の上に乗っかるのがむかーしから大好きだったよな」

満面の笑みでケビンが言うのだ。

「あ、それ言っちゃだめだった」

琥太が指をパチン、と鳴らしケビンを諷める。

「鬼！ 悪魔！ クソデブ！」

と貫太がまだされてもいないのに琥太をパッシングするのを聞き、

「おっと？ 今のは僕に喧嘩を売ったってことで良いね？ お父さん、明日家戻ったら貫太君を可愛がって良いですよね？」

琥太の笑顔の問いかけに、

「うんもちろん」

父の返事は速かった。

「嘘！ 親父俺死んじゃう！」

貫太の命乞いに対して、

「他の武道を学べるなんてお前はもつと自分の幸せを自覚した方が良いね」

とバツサリだった。

「……ふ」

まだ続く貫太の悪あがきとそれに対する琥太やケビンのやり取りの応酬を見聞きして鼻で笑っているだけの私だったが、

「柚真も明日は課外終わった後時間があるでしょう？ 琥太君たちの応援に行つてあげてはどうですか？」

片付けの一段落した母が唐突に切り出した。いつもはピアノの練習の為に断り続けているものだったが、

「良いね！ 是非来てよ！」

と馬鹿面で喜ぶ琥太を見てるとイライラしてしまい、

『明日午後から友達と遊びに行くの』

と返事をした。

「そ、そっか……」

一気にトーンダウンする琥太を見て、

「いや姉貴それ嘘でしょ」

助け舟を出すつもりなのか貫太が食い下がってきた。

「姉貴今日の朝言つてたじゃん。明日は課外終わったら暇つて。そんでじゃあ応援行こうぜつて言つたらイダダダダダダダダダダ！」

貫太の頬を力いっぱい引きちぎるようにして痛めつける。そんな私に琥太の目線が刺さる。別段責めるような目つきではない。

「……………」

まるで仔犬か何かのように無言で、身体

つきのに見下ろす形のはずなのに、メチャクチャ見上げるように見つめてくる。めんどくさい目つきだまったく！

「じゃあ決まりだね」

「明日は全国大会。頑張ってくださいね！」

という両親の言葉でこの話題は幕を閉じた。私としては男臭い、ふんどしだらけの舞台へと足を向けること自体が進まない。そもそも相撲自体、私は嫌いだ。

けど、折角ピアノが禁じられた訳であつて。今まで伝聞でしか伝わつてこなかった幼馴染の事を自分の目で見る事ができるチャンスである訳であつて。私は琥太にこう返事をした。

『気が向いたら行つてあげないこともないかな』

あいつは、確定でも何でもない返事を受けただけなのに、飛び上がらんかのように目をキラキラさせて屈託無く笑つて言うのだ。

「うん！ 勝ち進んで待つてるね！」

なんて。まるで幼子か、いや、犬かと返してまた筆談機の餌食にしたい気持ちが一度脳を駆け巡つたが、それが運動神経に指示を出す前に、それを止める指示を出すことができた。試合前日にそういうことをする程、無神経でもない。

次の日、試合当日だというのにあいつは家を出る私をいつものように見送つた。

その日の午後、私が国技館に入り最初に見た光景は、数多の歓声の中、いつものような雰囲気の中で勝ち名乗りを受ける琥太

の姿だった。

——連載第三回『渋柿騒動』へ続く